

## シンポジウム

# 「自然と人間のつきあい ― 食をめぐるって」

日程：2009年2月27日（金）

場所：国士舘大学梅ヶ丘校舎 34B302 教室

### 宇根 豊（百姓・農と自然の研究所代表理事）

<百姓からみた日本人の自然観を問う>

この西欧由来の「自然観」が、ヨーロッパでは農業政策を環境支払いに導き、日本では農業観を偏狭なものにしてしまった原因は、どこにあるのだろうか。それは日本語に「自然」という言葉がなかった百年前までさかのぼればわかることだろう。ところが、「科学」が介在することによって、ことは簡単にはほぐれなくなってしまった。

#### 1、自然とは何か・問題の所在

しばしば「田んぼは自然でしょうか」と人に尋ねてみる。「自然そのものだ」と答える人にはお目にかからない。みな、首をひねって、しばし考え込む。そこで、下のような図を示して、番号で答えてもらうと、多くの百姓は“4”と答え、多くの都会人は“2”と答える。ついでに紹介しておけば、「最も価値のある自然はどこですか？」という問いには、“1”という答えが、田舎でも都会でもほとんどである。

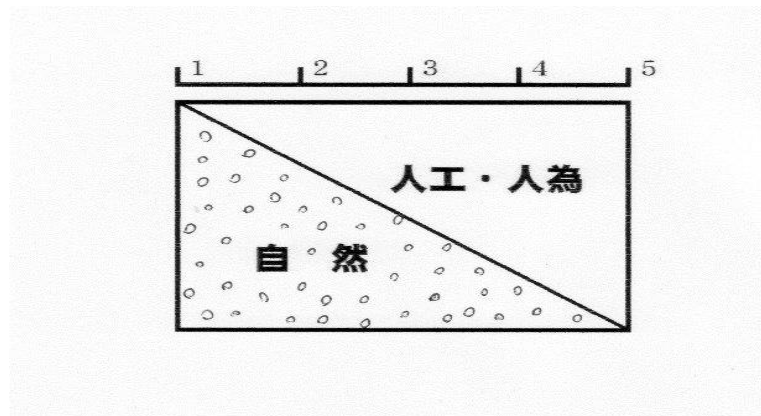
こういう自然観は果たして、日本人の伝統的な自然観だろうか。難題は二つある。ひとつは、自然のことを考えたり、問うときに、「自然」という言葉・概念を使用せざるをえないことに起因する畏（自然に対する先入観を与えてしまうこと）にほとんど誰も気づかない、ということだ。下図は、当然のように自然と人間を分けている。分けているからこそ、「自然」という概念が成り立っていることを、日本人は意識しない。もちろんこれはヨーロッパからの輸入思想であって、日本人の伝統的な自然観（すでにこういう言い回しが自家撞着に陥っているのだが、「自然観」とでも言わざるをえないのだから事態は深刻なのだ）とは、まったく異なる。そのことを意識できないぐらいに、ヨーロッパ的な自然観に染まってしまい、とり入れてしまった、と言えるだろうか。もしそうであるなら、事態は案外簡単に整理できるだろう。ところがそうはいかないのである。こうした二分法にどこかで違和感を現代日本人であっても、とくに年配者は抱いているのも事実である。だからこそ、前述の質問に簡単に答えられない人も多い。

次の難題はさらに、根が深い。下図のような「世界認識」は、自然に働きかける農業の耕造を誤らせることになったのではないかと、私は考える。“1”の原生自然が最も価値ある自然だという価値観は、(1)西洋では、「神が造ったままの自然だ」という意味で理解しやすいが、(2)一方、農業とは人間がその自然を壊していく形態だという理解も生み出す

ことになった。(もつとも、それゆえに農業と環境との関係も早くから問い詰められてきたことには敬意を払いたいが)(3)それが、果たして科学的に証明できるのか、簡単ではない。中程度攪乱説はむしろ伝統的な農業を養護する科学になりつつあるし、生物多様性はどちらの事例も示しているので、この図式には当てはまらない。(4)さらに、日本では自然と人間を対立的にとらえてこなかった伝統があるので、こういう図式では、自然の豊かさは表現できなくなる。つまり「自然」という概念を生み出すことがなかった仕事とくらしの評価はできなくなる。

このように、私たち日本人にとっては、「自然とは何か」は、明治以降(もちろんその前も)本格的に問われたことはなかったのではないだろうか。ましてや、農業においては、自然は「農業生産の制限要因」としては研究対象になっては来たが、農業によって豊かになり、日本人の好きな自然になったことは、つまり日本人の「自然観」を形成してきたことには、ほとんど踏み込んだ研究や考察はなかったのではないだろうか。

それを私たちの農と自然の研究所は、少しずつ限定的ではあるがやってきた。この成果の核心を今日は示したい。



## 2、生態学からの二つの贈りもの

残念ながら、はっきり言っておかなければならないのは、農学からは、自然(世界)認識の方法が生まれなかったことだ。後述するように、日本の百姓には科学的な方法とは別の自然(世界)認識はあったのに、それを理論化する農学が形成できなかった、というより他はない。私は農学を否定しているのではない。そういう方向に向かわなかったからこそ、日本農学は別の世界を見事に切り開いた、と言いたいだけだ。

それなのに、一方では生態学から、百姓に二つの贈りものが、自然認識の道具として届けられた。「生物多様性」という概念と「中程度攪乱説」である。どちらも未だ、本格的には農学の中には取り入れられてはいないが、まず生物多様性から農学の中にとり入れてみよう。

### 1) 「ただの虫」と「生物多様性」

「ただの虫なら農学から生まれた、生物多様性に似た概念ではないか」という指摘は提唱者としてはありがたいが、かなりの距離があったといわざるをえない。なぜなら、少な

くとも私は、生物多様性に先駆けて「ただの虫」という概念に到達していたのにもかかわらず、「生物多様性」に衝撃を受けた。なぜなら、これは農学にはなかった「世界認識」だと思ったからだ。私たちは、ただの虫と害虫や益虫の関係性、ただの虫と農業技術との関係性にばかり目を向けていた。生産重視の農学的な体質から羽ばたけなかった。

害虫	益虫 (天敵)	ただの虫
約 100 種	約 300 種	700 種

図 1 田んぼの生きもの(動物)の分類と全体像

私が上のような図を描くようになったのは、生物多様性と出会ってから以降である。これは田んぼの動物の生物多様性を示す図であると同時に、田んぼの動物界全体の科学的な世界認識でもある。私たちは、上の図の動物、さらに植物も含めて、全種のリストをつくらうと作業を進めている。(10月には第1次案を公表する)

しかし、果たして全種を科学的に明らかにしたからと言って、ほんとうに世界認識になるのだろうか。何より、百姓はこの全種すべてを識別できない。科学者だってそうだろう。専門分野の生きものしかわからないだろう。そうすると、だれが全種を認識するのだろうか。少なくとも人間界には誰もいないことになる。しかし「科学界」では、認識できる(ような錯覚に陥ることができる)ような気になることができる。まるで「神」になったように。これが科学が発明した世界認識であろう。すごいと思う。

「生物多様性」だって、(1)遺伝子レベルの多様性、(2)種レベルの多様性、(3)生態系レベルの多様性、があると説明されるが、私たち百姓が普段、こういう三つのレベルで生物多様性で、理解し、実感することはない。

むしろ、私たちは「生物多様性」を、伝統的な文化、あるいは個人の体験で実感しているからこそ、この概念に案外違和感抱かず済んで受け入れた。それは、(4)情感のレベルでの納得:生きものとのつきあいの経験=生きものに見とれ、生きものの死に涙する感性、(5)文化のレベルでの無意識の受容:自然を外から見ることがなかった伝統的な自然観=生きものの一員だった日本人=一緒に生きてきた生きものたち

しかし、日本人の情念・自然のとらえ方に「生物多様性」は新しい「科学的な」言葉を与えた、と言い切れるだろうか。たしかに、「生物多様性」は、科学には珍しく「世界認識」に肉薄している。だからこそ、科学的ではない印象もぬぐえない。なぜなら、私たちの情感と「生物多様性」はぴったり重なってはいないからだ。その重なり合わないところとは何なのだろうか。

## 2) 「中程度攪乱説」と百姓仕事

中程度攪乱説は、河原の氾濫原の観察からもたらされた。要するにほどほどに自然が壊

されると（攪乱されると）生態系は、遷移をやめ、種の多様性が豊かになるということである。畦草刈りを例にとるとよくわかる。畦草刈りをしないと、ススキや茅やヨメナなどの強くて背の高い草が優先化し、植生は貧相になる。そこで草を刈ると、強くて高い草がダメージを受けて弱り、背の低い、弱い草にも陽が当たるようになり、多様な草が育つようになる。わたしはこの説で、百姓仕事で自然を豊かにする仕組みが説明できるのではないかと感動した。しかし農学では、この中程度攪乱説の展開は、進んでいないように見える。それには理由がある。(1)どの程度の百姓仕事による攪乱が「中程度」かの基準は簡単にはつくれない。(2)そもそも百姓仕事のただの虫やただの草への影響などは、ほとんど研究されてこなかったし、研究方法も未確立である。(3)近代化された農業技術は、もはやほとんど極端な攪乱に達していて、概念自体が導入できない。

つまり「中程度攪乱説」と「生物多様性」をつなぐ回路は、農学の中では未確立だと言えよう。国を挙げて進められつつある「有機農業」の技術研究がこの回路に到達することができるのかどうか、期待をして見守りたい。

### 3、世界認識の方法論

ところで、伝統的な百姓仕事や百姓暮らしの中にあつた、農学や科学とは別の「世界認識」とはどのようなものであつたのだろうか。今日は、四つの局面で代表させてみたい。

#### 1) 「めぐみ」論

落ち穂拾いの風景をすっかり見かけなくなった。もちろんコンバイン収穫になって、落ち穂は拾いにくいことも理由だが、それよりもそこまでして、米を穫らなくてもいい、という精神が落ち穂拾いを廃れさせている。しかし、もっと深い理由にこの頃になって気がついた。

かつての百姓は米がたくさん穫れると「天地のめぐみが大きかったからだ」と、自然に感謝したものだ。現代では、「自分の手入れが、自分が採用している技術が優れているからだ」と自分を褒める場合が多い。

米を天地からの「めぐみ」だと思えば、めぐみをおろそかにすることは気が引ける。「もったいない」と感じるだろう。子どもたちに落ち穂拾いを体験させるのは、これが目的である。

一方、米の生産を自分の行為の結果だと思うなら、落ち穂を拾うか拾わないかは、自分が決めることだ。「もったいない」も落ち穂拾いの労賃と収益とを天秤にかけて決まることになる。2㎡に一本の落ち穂が落ちているなら、10アールに五百本で、約1kgになる。米の価格にすれば、約300円。この収穫のために30分かかると、時給600円。（さらに籾摺り、精米の仕事も必要になる。）これではやる気になれない、という判断は合理的だが、大事な世界を失うことになるかもしれない。

最近、驚くようなことを地元の93歳になる百姓に聞いた。これまでの自分の不明を恥じたものだった。「落ち穂は百姓以外の人ならだれでも、拾っていいという習慣だった。」

百姓は決して拾わなかった、と言うのだった。これは凄いことだったのではないだろうか。「稲刈りが終わると、袋を持った人たちが待っていて、田で落ち穂拾いに励んでいたものだった。」と懐かしんでいた。

「消費者との交流」なんてものではない。天地の「めぐみ」を、分かちあう思想が健在だった時代があったのである。決して百姓から消費者への「おめぐみ」ではなかった。

現在のコンバイン収穫では、落ち粃が1㎡に約千粒、つまりシイナや未熟粒が多いから約10g、ということは十アールあたり約10kgにもなる。相当な量だと言えよう。この「めぐみ」を雁や白鳥や鶴などの冬鳥がいただいている意味と価値をもう一度考えてみたい。一羽の雁が食べる粃は一日に約100gだとすると、一日に約10㎡の田んぼが必要になる。10アールで約100日分の食べものが雁のために、めぐみとして提供されている。

農が地元にあたりまえに存在しなければならない最大の理由は、農があればこそもたらされる「めぐみ」が、人間以外にも届けられるということだ。ここではわかりやすい「落ち穂」「落ち粃」を例に挙げたが、これ以外にも「めぐみ」無尽蔵にある。こういう世界の構造を、この国の百姓はつくりあげてきた。（こうして、生物多様性も支えられてきた。）

どうだろうか。内側からの「世界認識」は、天地のめぐみに行き着く。「めぐみ」とは、すぐれて農的な世界認識であった。しかしこの「天地」とは「自然」とは、大きく異なることに留意したい。近代化された「生産」から、こうした「めぐみ」がこぼれ落ちたことに目をそらさずに、この「めぐみ」を拾いあげ、もういちど世界に戻していく学はないものか。

## 2) 「できる」から「つくる」論

「米ができる」から、「米をつくる」への転換は、いつ始まったのだろうか。たとえば「安全性」を求める心情は、当然「トレーサビリティ」という管理体制に行き着くだろう。それも不断の立ち入り検査と内部告発がないと、腐敗する。こういう体制が、10年後も50年後も続くのだろうか。そもそも、近代化の何がこうした事態を招いたのだろうか。

数年前に隣の婆ちゃんから、トマトをもらった。「あんたの畑のトマトは、今年は早々と枯れあがったね。うちはまだなっとるけん、持ってきてやったとよ。」と言う。ここで私は、「農薬はいつ散布したと？何を散布したと？安全使用基準は守ってるやろうね？残留基準をクリアしているか、分析してみた？」などと、安全性のトレーサビリティ精神を発揮しようとはおもわない。うちのトマトの不出来を気にかけて、持ってきてくれた婆ちゃんの優しさに、感謝してありがたくいただいた。

この場合の「いただく」対象は、もちろんトマトだが、婆ちゃんの情愛でもあり、天地のめぐみでもある。婆ちゃんはトマトを育て、トマトができたのである、婆ちゃんが「つくった」のではない、と言い切れるだろうか。もし婆ちゃんが「つくった」のなら、安全性の責任は、婆ちゃんにある。一方トマトが、「できた」のなら、責任は天地にある。こう考えてくると、婆ちゃんが農薬を使用していることは、決定的な分水嶺ではないが、たしかに「できる」から「つくる」へと移行していると言わざるをえない。

「農薬」「化学肥料」の使用は、「できる」から「つくる」への移行を決定的にしたのではないだろうか。だから有機農業は、「つくる」への違和感を持ち続けてきたのではないだろうか。もちろん有機農業がすべて「できる」感覚で営まれているわけではないが、「できる」というスタンスを堅持しなければ、「天地・自然のめぐみ」から遠ざかり、天地・自然という「世界認識」を失うことになるのではないだろうか。

「つくる」ことは、しんどいことである。すべてに責任を負わなければならない。だから手が回らず、眼が行き届かず、「自然環境への影響把握」がおろそかになった。安全性の確保も難しくなった。そのあげく、「トレーサビリティ」のための書類書きに専念しなければならなくなった。「書類」で「数値」で、安全を確かめなければならなくなったのは、近代化農業の当然の帰結だろう。それなのに、なぜ有機農業までが、「書類」を「数値」を要求されるのは、冗談を通り越して悲劇ではないか。

消費する側が、あまりに近代化されつくしているからである。食べものは「できる」のではなく「つくられ」ていると思っているからである。この闇をどう照らしたらいいのだろうか。

### 3) 仕事論と技術論のすれちがい

仕事にあって、技術にないものは何だろうか。いっぱいあるだろう。「稲」「伝統」「情念」「情愛」「経験」「人間関係」「自然関係」「天地有情」「カミ」「伝承」「子ども」「祭り」「民俗」・・・・・・・・。逆に技術にあって、仕事にないものは何だろうか。もし、技術が仕事から抽出されたものなら、すべて仕事の中に含まれているから、そんなものは存在しない、ということになる。ところが、農業技術の中には、百姓仕事の中には存在しないものが存在する。それは、「イネ」「国家・国民」「近代化」「科学」「生産性」などである。これが、新しく付け加えられたものなのか、それとも農をこういう篩でふるって、篩の上に残ったものを「技術」と命名したのかもしれない。

つまり「技術」は、仕事に比べれば、普遍性を持ち、科学的で、国民国家にとっても有用なものだというイメージは、当然のことであって、そういうものとして形成されているのである。「いや、新しい技術も、それまでの経験と矛盾しないことが多いのは、科学的だからではないか。あるいは、百姓仕事の合理性を吸収し活かしているからではないか。」という好意的な受け止めは、多くの百姓に見られるものだが、そう言い切れるだろうか。豊作と多収は、異なる。「仕事ははかどる」と「生産性が高い」ことは別の思想だ。除草と草とりは似て非なるものだ。百姓仕事と農業労働も重なり合わない部分の方が多い。また家庭の自給の延長線上には国家の食料自給率は存在しない。

一つの象徴的な例で示してみよう。畦の草刈りの時にカエルが前を横切る。その度に私は、草刈りを躊躇して、立ち止まることになる。こういうことが、秋になると数メートルおきに続く。この躊躇して、仕事が滞った時間を累計すると、半日で10分になった。果たして、この10分は私にとって、日本農業にとって、日本農政にとって、日本国民にとって、国家にとって、無駄な時間なのだろうか。

現代の農学では、いとも簡単に、こう答えるだろう。この時間は、米の経済価値にとつ

ては、何の貢献もしない時間で、生産効率を落としている原因である、と。また、生態学者に、カエルという生きものを守っている時間だと弁護してほしいと懇願しても、「躊躇しなくなっても、せいぜい10アールあたり1000匹もいる沼ガエルを2、3匹斬り殺すぐらいなら、カエルの密度には影響はありませんよ」と、冷静な返事が返ってくるだろう。私が躊躇する行為は、学問的には、意味のない行為だということになる。それは、国民にとっても、国家にとってもそうだとということになるわけだ。近代化社会では、こうして、こうした百姓仕事の中の情愛を擁護し、価値づける技術論(思想)は衰えてきたのである。

しかし、別のまなざしもあってもいい。そこで私が、もしカエルに躊躇しないで畦草刈りをするようになれば、私は何を失うことになるだろうか。まちがいなく私の百姓としての、生きものの情感に反応する力は薄れ、生きものに包まれて生きる情念は死ぬ、と。そうすると、稲のまわりに広がる天地有情の世界と、稲の関係が見えなくなる。そして、この関係を語ることもなくなる。つまり、伝統的な世界認識を失うだろう。言いにくいことだが、「農業技術」には、世界認識の道が通っていない。

#### 4) 情念論

石牟礼道子さんの講演から引用する。

ご夫婦とも、村の働き神さんの中でも、いちぼんの神様だといわれていました。おば小母さんの方は足がかなわなくなりましてね、病院に行かれた帰りに、いつもわたしの家に寄ってゆかれます。ほんとうにいざるようにして家に寄られまして、

「もうほんに道子さん、蜜柑山の草がなあ、毎日、草が呼びよるばってん、行かれんが」とおっしゃるんです。それで、

「ああ草の声がなあ、切なかなあ小母さん、それで、おじ小父さんはどうしとられますか」と聞きますと、その小父さんが、

「男のほうが女より早う逝くけん、おれが死んだあと、おまえが友達のおらんけん、おまえに相手してくれるごと、蜜柑山なりと育てておこうわい」

と言いながら、畑にゆかれるのだそうです。ところがその小父さんも亡くなって、この頃では、小母さんもうとうとう蜜柑山に行けなくなりました。それで、近所の人が畑に行く時に、

「小母さん、蜜柑山に行くが、何かことづけはなかな？」

と声をかけてゆくんです。すると「はあい」と言っていざって出て、山の方をさし覗いて、

「わたしゃもう、足の痛うして。行こうごとあるばってん行かれんが……。草によろしゅう言うてくれなあ」と小母さんが言いなさる。

蜜柑畑にいけなくなった小母さんは、蜜柑畑の草に「よろしく言ってくれ」と言づけするのだが、なぜ、蜜柑の木ではなく、草に言づけするのだろうか。私たち現代人は、草とりは作物を育てる手段だと考えているから、草よりも蜜柑の樹によろしくと言うに違いない。小母さんには、草の声どころか、草と対話し、草の声が聞こえていた。草の心と交感できた仕事が、そこにはあった。それは「草とり」という仕事であって、決して「除草」

という農業技術ではなかった。

夫が残してくれた「草取り」という仕事に没入してきた妻にとって、草は夫に替わる「相手」だったのである。夫は、妻に、草とりという百姓仕事を残したのだった。ここには百姓らしい豊饒な世界認識が横たわっている。つまり、百姓仕事に没頭しているときは、夫がこの世にいないことも忘れて、天地有情の世界にとけ込んでいる。これこそが、人間の情念による世界認識そのものである。もちろん、科学では理解できないほど深い。

#### 4、世界認識のための新しい百姓仕事

「生きもの調査」が確実に広がっていきこうとしている。これで私たちの農と自然の研究所も心おきなく2010年3月には解散できる。ところで、「生きもの調査」は科学的な世界認識を目指しているように見えるかもしれない。しかし前述したように、百姓が調べているのは、田んぼでもせいぜい100種に過ぎない。これくらいの種の実態をつかんで、どうして世界認識に持っていきこうとしているのだろうか。最後にこの事例を解析して、本学会での私のつとめを終わることにする。

##### 1) 生きものを、なぜ調べねばならないのか

農学が「世界認識」に手を染めなかったために、田んぼでどういう自然の生きものが育っているかは、科学的にはわかっていない。たしかに「害虫」はまあまあ調査されているが、益虫、ただの虫にいたっては、ほとんど実態がわかっていない。従来農学では、それでも別に不都合がなかったということだろう。しかし、

①農産物以外の“めぐみ”を持ち出さないと、農が地元存在しなければならぬわけが説明できなくなった。「安くて安全な農産物なら、外国産でもいい」という意見に、説得力のある理由を示す必要が生じてきた。

②身近な自然を代表している農地の生きものすらも、絶滅の危機に追い込まれてきた。殿様ガエル、タガメ、丸タニシ、ドジョウ、メダカなどは絶滅寸前である。

こういうことが、引き金となって、「田んぼの生きもの目録づくり」「生きもの調査」が始まったのだが、これを日本で最初に「農業政策」に組み立てたのが福岡県の環境支払いであった。（正式名は「県民と育む農の恵みモデル事業」という。これから「農めぐ」と略すことにする。）

##### 2) 意外なタカラモノ

生きもの調査は、生きもの目録づくり（めぐみ台帳づくり）のための手段だが、驚くべきことに、調査自体が目的化してきた。つまり調査自体が楽しくなってきた、調査自体が仕事になってきたのである。ここから、二つの大きなタカラモノ（財産）がもたらされた、と言っている。

①「百姓の豊かなまなざし」が復活した。それは百姓仕事からもたらされる本来の能力だったのかもしれない。「タイコウチを30年ぶりに見た」と語っていた百姓の言葉は、タ

コウチの存在とともに、30年間の彼のまなざしの不在に眼を開いている。つまり、自然とともに仕事へのまなざしが復活してきている。

②「田んぼの生きもの目録」が自動的にできあがった。それは、紙の野帳や報告用紙の中にもあるが、一番の所蔵庫は百姓の胸の中だろう。一人一人がタカラモノ（生きもの目録つまり世界認識の帳票）をこれからは抱きしめて、生きていくことになるのである。

③田んぼの“めぐみ”（多面的機能）に対して、「環境支払い」を本格的にやろうと思うと、当然ながら、ア）「支払い根拠」を明らかにしなければならない。次に、イ）どれくらい以上の水準に達すれば払うのかという「基準」が必要になる。さらに、ウ）その「水準」を一人一人の百姓が確かめる（調査する）方法がなければならない。最後に、エ）その百姓の申請が妥当なものかをチェックする方法が必要になる。

福岡県の「農めぐ」は、このすべてに対応できる内容に組み立てられている。これらの4つの項目のうちもっとも重要なのが、イ）の「基準」であろう。残念ながら、3年間の百姓の調査にもかかわらず、県内全域に通用する画一的な「基準」は明確にならなかった。しかし、それよりももっと豊かなもの（百姓のまなざしや、生きもの目録など）がもたらされた、と言えよう。

### 3) 多面的機能を越えた「めぐみ」

百姓にとって「多面的機能」は外部からやってきた言葉・概念である。自分たちの実感とはかなりずれている。普段は意識しないコトを、「機能」として意識せよと迫られたわけである。「水田には洪水防止機能がある。」「水田には生物育成機能がある。」と言われても、そういうコトを目的に「稲作」をしているわけではなく、そういうコトが自分の百姓仕事の結果生じていると、実感することもない。ここが「農」のすごいところなのだが、これを百姓が実感し、自前の言葉で表現しないことには、この価値は誰にも伝わらないだろう。

「落水の時に、生きものが気になるようになりましたか」というアンケートに対して、「農めぐ」の参加者の57%が、そうだと答えている。（気にならないというのは10%である）これは生きものの「生・いのち」を感じているからである。その生と自分の落水という百姓仕事が濃密に関わり合っていることを意識しているからである。

こうして「生物育成機能」は、落水という百姓仕事と結びつくことによって、「機能」ではなく「実感」となり、意識される。ここから人に伝える言葉が生まれれば、それは「めぐみ」になり、家族や地域の人や消費者や県民と共有できる。

### 4) 「表現」「言葉」が一番大切

各地でよく聞かれることは、「まだ、こんなに生きものが生きていたのか」という驚きの言葉である。「ほんとうに、なつかしい」という言葉も聞いた。それは「今まで何を見ていたのだ」という深い反省を伴っているが、感動が過去の経験と結びついているところに最大の特徴がある。時の流れの中で、百姓も生きものも生きて来たが、両者の関係はだんだん希薄になって。それは日本社会の近代化の流れの中で、どうしようもなかったこと

だった。その流れの中で、いつの間にか姿を消した生きものも少なくなかったが、まだ生きのびて、こうして数十年ぶりに顔を見合わせる生きものがある。

このひとときに、感動は生まれてくるものなのだ。そしてこの感動・感慨を言葉に変えるものが、「伝承したい」という百姓の伝統だろう。なぜなら、自分も生きものとの関係を体験を通じて、引き継いできたからである。生きものへの“まなざし”は、時の流れを超えて伝わってきた農の文化である。これも「めぐみ」の一種かもしれない。

さて、ここで生まれる「言葉」がとても大切である。言葉こそが、「農のめぐみ」を伝えることができる。家族を、住民を、消費者を、田んぼに誘うことができる。このことを従来の「農政」はほとんど重視してこなかった。なぜなら「生産」が中心だったからだ。ここに来て、「食べもの」や「自然環境」や「生きもの」が話題にあがるようになると、新しい自前の、地域からの表現でないと、実感が語れなくなった。その語りを引き出し、鍛える場を提供するような「農業政策」がやっと、地方から生まれたのである。

たぶん、「農めぐ」の最大の成果は、百姓と地域住民の体の中に生まれた「実感」と「言葉」だろうと思う。言い換えれば百姓本来の豊かな“まなざし＝世界認識”だったんだろう。

表 あなたにとって田んぼの生きもの調査を実施する意義は何ですか？

	福岡県農のめぐみ地区		宮城県のグループ	
	実数 (人)	割合 (%)	実数 (人)	割合 (%)
1. 減農薬・有機農業の効果を確かめるため	50	29.6	19	20.7
2. 農産物に付加価値をつけるため	4	2.4	15	16.3
3. 環境支払いの支援金をもらうため	7	4.1	2	2.2
4. 農業に対する見方や農政を変えるため	11	6.5	12	13.0
5. 環境を守るため	43	25.4	—	
6. 地域のタカラモノさがし	5	3.0	—	
7. 家族や地域の子どものため	1	0.6	7	7.6
8. 未来のため	6	3.6	14	15.2
9. 生きもの名前や生態を知るため	15	8.9	12	13.0
10. 自分の楽しみや勉強のため	6	3.6	11	12.0
11. その他	5	3.0	—	
無効回答	16	9.5	—	
小計	169	100.0	92	100.0

※「農めぐ」地区では、ひとつだけ、宮城県ではふたつ選択してもらった。2007年12月。

#### 5) 食べものを間においての、人間と自然の関係

この頃の風潮で、とても奇異に感じるのは、食べものの安全性を追求することが当然のようになっていることと、食べものを人間が手にするのは当然のように思っていることだ。

最後にこの疑問への意外な回答を紹介して、小論の締めくくりとしたい。

私は子どもたちに語りかける。「君たちは、何のためにごはんを食べるの?」と。子どもたちは当然のように「生きていくため」と答える。食料は人間のためにある、わけだ。だから、ごはんに代わるものがあれば、パンでもラーメンでも、国産でも外国産でもかまわない。そこで、下の図を示してこう説明する。「もし君たちが、ごはん一杯を食べなかったら、オタマジャクシ35匹を殺すことになるんだ。」子どもたちはすぐに反論してくる。「言い過ぎだと思う」「そうかな。この前、田んぼに行っただろう。どれくらいオタマジャクシがいた?」「うーん、稲の株のまわりに10匹ぐらいかな」「そうだろう。ごはん一杯は、稲3株分だから、ごはんを食べることは、稲3株分の田んぼが必要になるよね。稲は稲だけで育たないから、オタマジャクシも一緒に育っているから、ごはん一杯を食べることは、オタマジャクシ35匹が育つ場所を守ることになるんだ。」これが、私たちが果たす最大の「自然保護」活動である。

このように、自然と人間は食べものでつながっている。このことを、「天地有情」と言う。「天地」とは自然を内側から見た様子であり、有情とは生きもののことである。この世は、生きもので満ちていて、その有情同士は深い関係で結ばれている。もちろん人間も有情の一員である。

